

心の記憶

「まさか山が崩落するとは…」今回の豪雨災害は、誰もが想定していなかった被害が各地で発生しました。
災害を伝え、災害を考えるため、今回4人の心の記憶を辿ります。
この記憶から今私たちにできることを一緒に考えてみませんか。

地域の人と手と手を取り合って

7月5日は朝から大雨が続き、午後から避難準備・高齢者等避難開始が発令され、すぐ地区の見回りに行きました。川は既に増水し、道路や橋のすぐ下まで水が来ており、河川が決壊する恐れがあるため、小野振興センターに避難するように呼びかけました。

7月6日、午前9時30分過ぎに柳野付近で大きな地鳴りが聞こえ、砂煙と共に山が大きく崩落していました。この土砂は、川の対岸の道路を越えて民家に流れ込み、川をせき止め家屋を浸水させました。見回りをしていた人や柳野公民館に避難していた人たちはお互いに声を掛け合い、高台に避難することができました。

災害発生後は多くの支援を受けながら、できるだけ環境の良い避難所へと転々しました。誰もが大きな不安やストレスを抱えながらも表には出さず、協力し合い大変な避難生活を乗り切ることができました。これも昔から培われた地域の絆だと思います。今回の災害で尊い若い命を失ったことは痛恨の極みでありませぬ。まだ家に帰れない方もいます。今後は人命第一、自助、共助を柱に防災に努め、皆さんと共に復興に向け進みたいと思います。



小野地区鈴連町自治会長
野田高德さん

私のふるさと

今回の災害では自分自身の家も被災しましたが「なんとかなる」と信じ、すぐに地域復興を目的とした「鶴の恩返し」という支援活動団体を開設しました。今まで、熊本地震などで災害ボランティアを行った経験から、災害時の支援活動の流れが分かっていたので、まず初めにボランティアの宿泊施設の確保や、支援物資の配布と保管場所の確保を行いました。災害の直後、南阿蘇の災害ボランティアで知り合った方たちが「恩返しです」と沢山の飲み水やトラック、ユニボ等も持ってきて、大量の土砂や流木などの撤去をしてくれました。復興途中の南阿蘇の活動を中断して駆けつけてくださったという事実を知っていましたので、このことは今思い出しても、目頭が熱くなるほどありがたく、心から感謝しています。他にもここでは語り尽くせない方々のご支援によってここまで復旧できてきたことを思うと感謝の気持ちで胸がいっぱいになります。

しかし、災害直後は被災者だけでは太刀打ちできない状態で、日本全国からボランティアの方々が手を差し伸べてくださるのですが、いざれ責任を持って復興していくのは地元の人たちです。

先日、長崎から支援に来た方が、「私のふるさととは九州ですから」と言ってくれたり、多くの支援物資を届けてくださいました。現在でも流れて来たゴミだらけの私のふるさとの風景ですが、以前のような、桜の花が似合う、レンゲの花が似合う、ホタルが似合う風景に復興すべく、九州を、日田市を「ふるさと」と思って、一緒に取り組んでくれる少数の仲間と活動に取り組んでいます。

まだまだ始まったばかりです。同じふるさとを持つ方々、志を同じくして一緒に活動しませんか？



鶴の恩返し
江田 泉さん

危険予知のために身近な目印を

7月5日、正午過ぎから雨が激しくなり、雨雲レーダーを見ていたら、線状降水帯が朝倉市付近から徐々に発生。次第に、雨は脅威を増して降り続いたので、市の防災・危機管理室に「至急、避難を促して頂きたい」と電話しました。その後、近隣の方と連絡を取り合い、上宮地区に自主避難の告知放送を行いました。市街地は雨がほとんど降っていない状態で、地域での降雨量の差を感じました。

市から避難準備・高齢者等避難開始が発令された頃には、祖父父母から「あの川の石が隠れたら大水が出るよ」と教わっていた石が隠れ、その近くの田んぼを超えて流れていました。これは普通の状態ではないと感じ、「これで最後です。放送を終わります」と3回目の告知放送を行い、この言葉で危機感を感じ避難した人もいました。

平成24年の災害で危機意識が芽生え、雨雲レーダーのチェックや早めの対応を行うように心がけ、地域の人と協力したことで人的被害が無かったのだと思います。今後はどこで災害が起こるか分かりませぬ。地域で「ここがこうなったら危ない」など身近な目安を見つけて危険予知をすることが大事だと改めて感じました。



大鶴地区上宮町自治会長
藤井隆幸さん

手作りの雨量計

目印の石は、今回の豪雨で流されてしまいましたが、現在はペットボトル2本で簡単に作れる雨量計を用いて、雨量の計測を行っているそうです。

家庭で簡単に作れますので、是非皆さんも活用してみてください。

※作り方は「神戸地方気象台雨量計」とインターネットで検索。

手作りの雨量計▶



ボランティアって何するの？

災害発生から、4か月が経ちました。しかし、被災地では支援を必要としている方がまだまだ多くいます。

現在、私たちが運営しているひちくボランティアセンターでは、「災害に強い町づくり」をテーマに、被災地のニーズ調査、ボランティアに参加していただく方々の受け入れ、被災現場への派遣業務等を行っています。

この活動をしていて、「私にもできることってありますか？」と聞かれることがあります。実際、被災地では土砂撤去等作業以外にも様々なボランティアが活躍しています。例えば、ひちくボランティアセンターの受付の手伝いしてくださる方、ボランティアに参加した方のためにおにぎりを握って持ってきてくださる方、毎週末来てくださる鍼灸師の方等、様々なボランティア活動があります。

できることは誰にでもあります！もし、皆さんの中で力になりたいけど何をしたら良いか分からないという方がいましたら、是非「ひちくボランティアセンター」(☎090-5284-4733)「までご連絡ください。

「ひちく」とは？

ひちくとは、「肥筑」と書きます。地域の総称で、エリアとしては、中・北部九州地方を包括しています。今回の災害で被災した福岡県西部や大分県日田市もエリアに含まれます。この先支援のエリアが広がったときにも必要があれば「ひちくボランティアセンター」として対応したいという思いを込めて、この名前を名付けました。(ひちくボラセン通信より)



ひちくボランティアセンター
(地域おこし協力隊大鶴地区担当)
矢羽田健太さん